志を抱き競争力を伸展させよう

元徳島大学長
武田 克之

大学は各種の要求や思惑をもった人間集団の一面を有し、「ここ迄くれば安全」という到達点をもっていません。1949年（以下'49と略記）、戦後の学校制度改革に際し、徳島の高等専門学校を中心に新制徳島大学（本学）が設置されました。当時、校舎の多くは戦災を受け、設備も不足していましたが、学生・職員は復興の意気に燃え、空地や練兵場跡の運動などで、友情を深めていました。私らは全国から集まった友人と話し合ってラグビー部を創設し、楕円球を投げ、掴み、先頭きって走る練習を重ね、勝つための自己犠牲の心情も修得しました。本学の教育・研究・診療にあたる各構成員は現状に不満を訴えるより先づ以て、「不足は自分が埋めてやろう」との心意気を高めねばなりません。

現在、大学は「独立行政法人化」の実施と世界的研究拠点形成を期する重点的支援（21世紀COEプログラム）の「トップ30」申請・実践など大変革の真只中にあります。このプログラムは、わが国の大学が世界のトップレベルの大学に伍して、教育・研究水準の向上や世界をリードする創造的人材を育成する競争的環境の醸成を目指したものです。今回、この一環として大学院の優れた研究教育計画に補助金を重点配分する文部科学省の'03年度COEに、本学医学研究科から①医学系COEに申請した「多因子疾患克服に向けたプロテオミックス研究」と②学際、複合、新領域COEに申請した「ストレス抑制を目指す栄養科学研究」が採択されました。現時点では2件採択は稀であり、学長はじめ全教職員の努力による快挙といえます。大学の使命は学術の創造（研究）、伝承（教育）、普及（社会貢献）であり、産学連携が叫ばれている今日、「トップ30」採択は極めて意義深いものです。

ともあれ半世紀を越える大学生活を振り返り「大学で常に不足しているのは時間」であると痛感しました。天才・奇才でない限り、得られる成果は努力して働く時間に比例します。学長時代、週末に医学部を訪れた際、教室にあかりが点り、研究・実験を進めている部局は業績をあげており、発表論文数も多かったのです。自ら足を運び、手を汚した領域の知恵のみが後進を指導しえます。本学教職員は週休2日制の今こそ週末の活用を忘れてはならず、苛酷な論文修業にも耐え、常に生々として、高い志を抱き競争力を伸展されるよう期待しています。